

仕事の価値

2020.8.26

自分の仕事には、価値があるのだろうか。それは、誰もが、ふと感じる疑問なのではなかろうか。「二人の石切り職人」という寓話を紹介する。

旅人が、ある町を通りかかりました。その町では、新しい教会が建設されているところであり、建設現場では、二人の石切り職人が働いていました。

その仕事に興味を持った旅人は、一人の石切り職人に聞きました。

あなたは、何をしていますのですか。

その問いに対して、石切り職人は、不愉快そうな表情を浮かべ、ぶっきらぼうに答えました。

このいまましい石を切るために、悪戦苦闘しているのさ。

そこで、旅人は、もう一人の石切り職人に同じことを聞きました。

すると、その石切り職人は、表情を輝かせ、生き生きとした声で、こう答えたのです。

ええ、いま、私は、多くの人々の心の安らぎの場となる素晴らしい教会を造っているのです。

どのような仕事をしているか。それが、私たちの仕事の価値を定めるのではない。その仕事の彼方に、何をみつめているのか。それが、私たちの仕事の価値を定めるのだと思う。

自分の今までの仕事を振り返ってみた。正直にいう。若い頃は「これが教員の仕事なのか」「自分はこんなことをするために教員になったのではない」などと思ったことがある。だからといって、誰かに不満をぶついたりしてはいない。すべて“仕事”だと理解していた。ずいぶんと前のことになるが、今以上に、教員はいろいろなことをしていたのだと思う。日本の中学校の教員が、世界で一番忙しくなるわけである。

学校ではない所に勤務していたときには、少しは大人になっていたのだろうか。「この仕事は誰かがやらなければならない」と割り切ることができた。

思い返してみると、一つもむだなことはない。結局は、すべて役立っている。「人生にむだなことはない」という人もいる。忙しくなったり、追い込まれたりすると、目の前のことしか見えなくなるときがある。きっと若い頃がそうだったのだと思う。

しかし、いくら忙しくなっても、はるか遠くを見ていれば、感じ方、受け取り方が変わってくる。何を目指しているのか。志はあるのか。夢は何か。自分は何のために教員になったのか。このようなことをしっかり考えていれば、目の前が開けてくるはずである。

「職業に貴賤なし」という言葉がある。価値のない仕事などない。仕事の価値、すなわち社会にどのくらい貢献できているか。このことが大切だと考える。これから本校の3年生の多くが、就職試験というハードルを跳び越えて、力強く社会に飛び出していく。ときには、目の前のことで一杯になってしまうこともあるかもしれない。そんなときは、ちょっと遠くを見てほしい。はるか彼方に、自分が追い求めるものがあれば大丈夫である。